

(変更前)

第1節

初期の都市開発

第1項 江戸図から見る港区区域の開発

② 江戸の範囲と港区区域

近世後期の江戸は人口100万人を突破していたと考えられ、世界最大級の都市であった。市街地の範囲は直径10キロメートルの円を超えるほどに広がっていた。文政元年（1818）、幕府は初めて江戸の範囲を公式に確定し、絵図上に朱色の線（朱引線）を引き、その内側を「朱引内」（御府内）とした。これは、東は亀戸、北は小塚原・尾久・板橋、西は角筈・代々木、南は品川に至る広範囲に及ぶものであった。

これとは別に江戸町奉行の管轄範囲を示した境界線を墨引といい、これは朱引より一廻り小さい範囲に該当する。ただし、中目黒村・下目黒村は例外的に朱引外にもかかわらず墨引内であった。これは、現在のJR山手線と都営大江戸線環状部分の範囲をイメージするとおおむね近い。

以上の範囲を示したものが図1-1である。現在の港区区域をグレーの網掛けで重ねると、これらはすべて朱引内（御府内）・墨引内に位置していることがわかる。江戸城下町は郭内（外堀と隅田川で囲まれる範囲）を中心として次第に外側へと拡大を続けてきたが、郭外南部の大部分を占める港区区域の変遷を追うことは巨大都市江戸の南方への開発過程を知ることにはかならない。そこで、以下では江戸図を素材として17世

① 48W × 17L = 816字

② 吊り見出し

③ 半角英数字

(変更後)

第1節

初期の都市開発

第1項 江戸図から見る港区区域の開発

② 江戸の範囲と港区区域

近世後期の江戸は人口100万人を突破していたと考えられ、世界最大級の都市であった。市街地の範囲は直径10キロメートルの円を超えるほどに広がっていた。文政元年（1818）、幕府は初めて江戸の範囲を公式に確定し、絵図上に朱色の線（朱引線）を引き、その内側を「朱引内」（御府内）とした。これは、東は亀戸、北は小塚原・尾久・板橋、西は角筈・代々木、南は品川に至る広範囲に及ぶものであった。

これとは別に江戸町奉行の管轄範囲を示した境界線を墨引といい、これは朱引より一廻り小さい範囲に該当する。ただし、中目黒村・下目黒村は例外的に朱引外にもかかわらず墨引内であった。これは、現在のJR山手線と都営大江戸線環状部分の範囲をイメージするとおおむね近い。

以上の範囲を示したものが図1-1である。現在の港区区域をグレーの網掛けで重ねると、これらはすべて朱引内（御府内）・墨引内に位置していることがわかる。江戸城下町は郭内（外堀と隅田川で囲まれる範囲）を中心として次第に外側へと拡大を続けてきたが、郭外南部の大部分を占める港区区域の変遷を追うことは巨大都市江戸の南方への開発過程を知ることにはかならない。そこで、以下では江戸図を素材として17世紀の港区区域の空間的変容を分析してみたい。

なお、本項で取り上げる図は便宜上すべて北を上にあらためている。

① 48W × 20L = 960字

② 見出し

③ 縦書きの場合は漢数字

④ 図表番号は半角算用数字